

田村俊子「あきらめ」論

—— 女学生たちの行く道 ——

張 備

はじめに

日本における女子高等教育の発足は明治初期まで遡ることができ、明治三三年には「高等女学校令」により、各地に高等女学校の設置が義務化され、高等女学校への進学率が大きく伸びてきた。女学生というグループも人々の視界に入る。

田村俊子の本格的なデビュー作とされている「あきらめ」¹には萩生野富枝、三輪初女、房田染子三人の女子大生が書かれている。他にも女子大の卒業生、同級生、先生など女学校と関連する人物がたくさん登場している。萩生野富枝は、筆馴らしに書いた脚本が新聞懸賞脚本に当たったことで学校に目をつけられてしまう。新聞懸賞脚本に当たったことは、「まづ根底を作つて、立派な美しい花を将来に咲かせやうと勉める」(一)という学校の主義に反したため、学監から注意を受け、中退させられてしまう。しまいには継母の迎

えによってまだ一度も行つたことのない故郷である岐阜へ出発する。物語においては、富枝、三輪と染子三人の女学生の前途に対する迷いと無力さが織り込まれている。

発表当時当作品については、俊子の観察の皮肉さ、心理解剖の豊かさ、作品に漂う官能の匂いを中心に評価が行われていた。例えば、森田草平³は「美しき感能のにはほも有れば(中略)皮肉な観察、穿ちたる心理解剖にも豊か(後略)」と指摘している。フェミニズム批評の導入により、田村俊子と「あきらめ」は再び組上に載せられる。長谷川啓⁴は「あきらめ」の改稿過程に着目し、「シスターフッド、レズビアン、フェミニズム、ジェンダーがまさに出揃った、新しい女の時代幕開けの象徴的な空間なのである」と評している。小平麻衣子⁵はそれを踏まえ、消費のジェンダー化という視角から、「あきらめ」にみられるジェンダー・パフォーマンズと、化粧品広告などの関連を論じた。また、山崎真紀子⁶は緑紫という男性人物を分析

し、富枝をあきらめさせたのは男性上位の社会の抑圧と指摘している。加えて、小説「あきらめ」に用いられた「あきらめ」と「諦め」という二つの単語について分析し、「男性の力を利用して「敵陣のなかへ」入り込むことで自らの欲望を叶えていく三輪とは対照的に、富枝は脚本家になる夢とは逆の、祖母や義母の期待に合わせるために中央から去る（中略）ひとりで岐阜に向かうのであった」と、富枝の敗北を述べている。それに反発する論として、設楽舞は「富枝を諦めた敗北者とした論に対して、むしろここでは、敢えて三輪とは違う生き方を選択した富枝の決心に注目して」「あきらめ」を読み、富枝の選択の主体性を強調する。以上のように、先行論においては、富枝らの「女学生」としての側面と「あきらめ」の結末との関連性や作品の持つ女子教育への批判性はさほど重視されていない。換言すれば、今までの先行論は「あきらめ」を「女学生物語」として読むより、「性差問題」或いは「女性の性の問題」を提起するものとして読んできた。しかし、「あきらめ」の主たる登場人物は、なぜ三人ともに女学生として設定されているのだろうか。

本稿では、「あきらめ」も女学生をテーマにした同時代の小説群の一つであることを前提にして分析していきたい。論の手順をあらかじめ述べれば、まずは当時の女学生を主題とした流行作品と同時代の言説をみることで、「あきらめ」の特異性を確認する。その上で、小説「あきらめ」における三人の女学生の関係と富枝の結末の意味

について見直してみる。また、三人の女学生と俊子の関係についても触れる。

一、語られる女学生

明治維新以降、公立女学校や女子師範学校が開校していたが、その進学率は男子の三分の一にすぎなかった。明治三二年高等女学校令が公布されてから、各地は高等女学校の設置が要求され、高等女学校への進学率が大きく伸びてきた。とはいえ、当時高等女学校を卒業し、さらに高等教育まで受けられる女子はかなり限られている。その実態は以下の資料からも確認することができる。

明治の末年でも、女学校への進学者は同年齢の二〇パーセントにも満たない。男子との教育格差の中で、「玉の輿」に乗る条件の一つが「女学校卒」であった。

そしてさらにその中のほんの一握りの人たちが、「女子に高等教育は必要なし」の激しい批判や、揶揄の中で進学する。男子系の高等教育機関への入学は拒否されていたから、わずかな私立女子専門学校や女子高等師範学校に入り、幾人かは、さらに欧米留学の道を選んだ。

高等女学校が急激に続出し、女学生という特殊なグループが形作られていく。新しい面貌で現れる女学生たちは、日本近代の欧化にともない、たちまち大衆とジャーナリズムの注目の的となり、脚光

を浴びた。「高等女学校令」の骨組みになったのは、いわゆる「良妻賢母主義」である。つまり明治政府は、法律と教育を通じて女性を家庭の範囲内に組み込もうと企んでいた。ところが、近代の西洋思想と知識に馴染んだ女学生たちとその主義の間ではずれが生じる。

庇髪に海老茶袴スタイルの女学生たちは、一般人の羨望や憧れの対象である一方、その階級や新旧文化の境界線を乱す活発さと奔放さは、各方面からの侮辱と非難も招いた。例えば、浦門は「女らしき女こそ国の宝である。明治時代の女子が文化の発達と共に、敏捷に活発になったのは、実に賀すべきことである。然るに今に尚ほ少し学問などさすると生意気な女らしくない所の性質ができてくる傾向がある」と、女子学生の「生意気」、「女らしくない」ところを述べている。また、棚橋絢子は「女学生墮落の遠因」において、「所謂女学生の墮落に就いては、種々なる原因の錯綜して、今一概に之を挙示すること難からん。されど妾は、その遠因、源泉といふべき有力なるものは、恋愛の二字なりと信ず」と女学生の墮落の原因として「恋愛」に罪をさせる。稲垣恭子は、こういう一連のバッシングには、「西洋的文化や学問の世界に参入しようとする「女学生」という存在への違和感と、それに伴う反感や嫌悪感が強く映し出されているのを見ることができよう」と指摘している。そのような女学生に対する感情の二面性は、ジャーナリズムに利用され、ス

キャンダルの対象として報道される。『読売新聞』をはじめとした新聞社ではこの時期に、女学生の醜聞、特に恋愛によって墮落していく事件が集中的に報道されていた。¹²

では文学言説における女子学生はどのように扱われているか。まずは男性作家による作品をいくつか確認しておきたい。女学生が恋愛によって墮落してしまう作品として、菊池幽芳の家庭小説「己が罪」¹³があげられる。箕輪環という女学生は医大生に騙され、子供も産むが、結局二人の子も死んでしまう物語である。これと共通のモチーフを持っている、明治三六年一月から九月にかけて『読売新聞』で連載され、増刷するほどの大人気を得た小杉天外の小説「魔風恋風」も、ヒロインに萩原初野という女学生を登用している。初野は両親がなくなり、上京して女学校に通う。彼女は友達の数嫁と恋愛関係になったが、結局挫折し、病に倒れてしまう。

注目すべきは、ヒロインの初野の下宿の様子が「海老茶の袴、髪は結流しにして白リボン清く」という凛々とした初野の初登場と対比的に書かれていることである。まるで初野が墮落の道に落ちるのをサジェストするように、都会とかなり離れた「看護婦、産婆、まだ給料に有付かぬ女教師」などが混住しているポロポロな下宿屋が彼女のために用意されている。さらに、下宿の主婦と殿井が初野の部屋に潜入して薬と質屋の通い帳を見つけた時に、殿井は「だから、人は見掛に依らぬ物さ。此様な事を為さるんちゃ、最う、品行も

大概推測が附くさ」と初野の不品行を憶測する。こうした女学生への悪評は、同時代の他の作品からも見出せる。

美しいこと、理想を養ふこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいっとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備へて居た。¹⁵〔蒲団〕『新小説』明治四〇年九月

主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執る積りと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合せた様に情夫をこしらへて出奔しても、矢張り自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見て居るだらう。¹⁶〔吾輩は猫である〕『ホトトギス』明治三八年一月から明治三九年八月まで連載

一方、「あきらめ」でも、半田は千早文学士が発掘した新人女優の三輪について、「白粉をつけた役者がすきで墮落した女学生上りと云つた様なもの」（九）と疑う。まさに、女学生に対して先入観を持っている男性の有り様がここには書き込まれている。

続いて明治以降に女性が書いた初めての小説である、三宅花圃の『藪の鶯』（金港堂、明治二二年六月）を見てみよう。小説には以下のような会話がある。

服「ですからこの頃は学者たちが。女には学問をさせないで。皆な無学文盲にしてしまつた方がよからうといふ説があります

とサ。（中略）何でも一つの専門をさだめて。それをよく勉強して。人にたかぶり生いきの出ないやうにして。温順な女徳をそんじないやうにしなければいけません。さうすれば子孫も才子女が出来て。文明各国に恥ない新世界が出来ませうと。或方がおつしやい升た。」

齋「（前略）一生懸命で学問しても。奥様になりやア仕事をしたり。めんどくさくつていやだワ。わたしやア独立して美術家になるワ。畫かきになるワ。（後略）」¹⁷

以上の引用で分かるように、『藪の鶯』には、坪内逍遙の『当世書生気質』に対する「女学生気質」と軽浮な欧化主義への批判が映されている。しかし、作品全体の内容からみると、結末はやはりおしとやかな女性の方が幸せになる。この批判の不徹底さは、検討すべき点であろう。

以上のように、女学生を非難する言説は小説の空間にも多数確認できる。また、内容面では、ヒロインを女学生とする作品は、その殆どが恋愛問題に関心を寄せ、そして墮落の烙印を押し付ける。

逆に「あきらめ」をみると、その主題は富枝の恋愛問題だとは言い難い。無論、富枝と染子の関係を恋愛と見なすこともできるが、もっとも鮮明な主題ではないと思われる。「あきらめ」に実際に出ている主要人物は男性より女性人物のほうが圧倒的に多い。全体的にみれば、「あきらめ」にはだいたい二つのストーリーラインがみ

られる。一つは富枝三姉妹の成長物語で、もう一つは富枝と染子、三輪三人の女学生の自立物語である。この二つのラインは富枝の動きによって絡み合い、女子教育、女性の性と自立の問題、男女の対立および親孝行問題など複数のテーマを提起する。女学生の恋愛、墮落ではなく、自立のために一生懸命頑張っていた女学生の姿が細かく描かれている。この点からみれば、小説「あきらめ」は明らかに同時代の女学生を扱う小説とは異なる。

一、二つの道

第一節では、明治中期から末期にかけ、小説における女学生についての言説とその内容を大まかに見渡し、「あきらめ」の特異性を確認してきた。

前述のように、「あきらめ」には二つのラインが織り混ざっているが、ここでは女学生と女子教育問題について焦点をあてる。本節では、主に染子と三輪二人の人物像を見ることで、女学生たちが直面している問題を探りたい。

まず、富枝が可愛がっている後輩の染子を見てみよう。染子は「文部次官の娘」で、いわゆる上流社会のお嬢様である。当時高等女子教育を受けることができるのは、殆ど中流階級以上の家庭に生まれた女性に限られている。富枝自身の家庭環境も決して貧乏とまでは言えないが、染子と比べるとかなり格差が大きい。二人は富枝が作っ

た「早子姫」という劇を通して親しくなっていく。

今まで、染子についてはほぼ富枝とのレスピアン・ラブ関係から述べられてきた。では他の視角からみてみると、どうだろうか。

染子は一見従順な伝統的な日本女性に見えるが、完全な「良妻賢母」的な女ではない。特に染子の恋愛に対する姿勢はかなり積極的である。自分の意思で恋愛しようとすることも、人格独立への努力の一つと言えよう。染子の恋愛に対する熱烈さは、富枝の回想からもわかる。

其の次ぎに妹にして呉れと云つて艶麗な文章で手紙を寄せした。其れへ雑とした返事をやつてから四五日目に、一人で図書室の前の桐の木に寄つてゐると、其の後へ何時か染子が来てゐて黙つて立つてゐた。(八)

そして、染子が富枝の作った脚本の早子姫役を演じてから、彼女の富枝への熱が一層猛烈に燃えていく。病が治ったばかりであるのに、富枝を迎えるため、一人こっそり大磯から真直ぐに富枝のところへ来る染子の行動に顕著に見られるように、染子の富枝への気持ちは最後まで変わっていない。つまり、染子は愛情を追求する女学生の道を辿る人を代表していると言える。

しかしながら、染子の微弱な反抗はとうていその階級、出身を超えることはできない。結局、染子は親の決めた男性と結婚することを余儀なくされる。

染子以外に、もう一人富枝と深く関わった女学生がいる。三輪である。三輪はわずか半学期で女学校を退学した富枝の憧れの先輩である。富枝の義兄との浮気疑惑で一時期富枝との交際が途絶えたが、女優として朝菅一座に入り、富枝と再会する。

染子と違い、三輪は恋愛や結婚よりも、自身の出世の方を重視する。長谷川啓¹⁸がすでに指摘している通り、初出の「あきらめ」は、初刊に収録する時に三分の二が削除、加筆され、特に「女性たちの描写がかなり削除されており、甚だしいのが女優志願の三輪に関する場面であった。例えば初出の三十六回と三十七回には「これで、劇界になり、文藝界になり、特殊の功績を残したいといふ抱負があるのだから可笑しいと、話し合つてゐる」、「出雲の阿国ぢやないけれども、何か妾だけに劇界の女優として、一時代起こしたいと思つてゐるの」、「遣つて頂戴。妾もこれで文学史に何か留めなけりや置かないつもり」などのような、富枝と三輪が各自の抱負について語り合う描写がある。富枝にとって、三輪はかつての憧れの対象だけでなく、一緒に将来の自立への抱負を語り合う仲間でもあった。三輪と緑紫のかつての関係は曖昧であり、これが原因で三輪は富枝との交わりを一時的に断つた。また、三輪と千早文学士との関係も疑わしい。自分の名誉さえ洋行へのチップとして利用する三輪は、女性を支配しようとする男性たちを逆利用しようとしている。つまり、彼女は男性を利用して出世する道を進む。¹⁹

以上のように、染子と三輪それぞれの運命は、女学校から逸脱する女学生の二つの結末を代表していると言える。一つは、自由な恋愛を求めたが、結局社会、家庭制度に屈服する結末である。もう一つは、男性を利用して自立しようとしたが、出世できずに日本の社会から逃げる結末である。

三、「二つの道」をあきらめる

「あきらめ」の冒頭において、富枝はすでに新聞懸賞脚本の当選で、女学校の主旨に違反し、退学せざるを得ない状況に陥っている。自分の行く道に戸惑っている富枝にとって、染子と三輪が選ぶ道が参考になる。

ストーリーの展開は富枝の動き、特に自発的な動きによって推し進められている。富枝は自ら染子と三輪に接近し、彼女たちの行く道を確認しながら、自分の行く道を探す。しかし、富枝はなぜか、染子の道も三輪の道も選ばなかった。

まず、染子という、自分に憧れている可愛らしい後輩に対し、富枝は彼女を可愛がりながらもいつも冷静な態度で二人の関係を考へて、恋を強く欲する染子に、「いくら貴女が私を恋ひしがつてくれても、貴女は貴女、自分は自分と別々にこの世の中に生れて来たのがもう運命で」、「私は一生かうして貴女の傍にはみられませんもの」(十四)と語る。さらに、自分に恋している染子の姿を見ている富

枝は、「可愛いがり切つてゐる美しい小姓が死んでから」、その死骸を食べる秋成の物語に出る坊さんの姿を思い出し、「慄然としながら、染子を離して、染子を見る」。つまり、富枝は最初から、染子が望む恋の道をうまくいく道だとは思っていなかった。むしろ、その道に対して恐怖感さえ覚えている。染子はその家族と階級には勝てないことを、富枝は予感していたからである。彼女の予感的な中したことは、小説最後の一節で裏づけられる。染子は結局、親が決めた相手と結婚することになるのである。

富枝は染子のが好きだが、房田家と染子の属する階級を好きになれない。不合理な制度と家長の言いつけに反抗する力を持たない染子は、その家庭と社会制度の犠牲者になることを運命づけられている。恋愛に情熱を持っている染子ではあるが、結局世論や家庭制度に反抗できぬまま流されていく。このような染子の生き方は、明らかに富枝が念願している自立の道ではない。

染子とは違い、三輪と富枝はかつて一緒に夢を語り合う仲間であった。富枝は三輪と同じ目標を持っている。しかし、富枝は三輪が選んだ道も歩かなかつた。それはなぜだろうか。

小説「あきらめ」における三輪の初登場は、緑紫との関係で富枝と一時連絡を絶つた三輪が富枝と再会する場面である。昔の仲間と再会して喜んでゐた富枝は、三輪と昔のように話すのを期待して三輪に接近する。しかし、「三輪は昔富枝を一人の話相手にして劇界

へ立つての抱負を語つたり、自分の感情を富枝の前には露にしたやうにして今の富枝には対さなかつた」（十三）。その時、富枝はまだ三輪が選んだ道と自分が選択したい道との違いがよく分かつていなかった。三輪と緑紫、千早文学士との関係も、富枝は疑ってゐなかつた。自分が選びたい道を確認するために、富枝は再び三輪に接近する。富枝は姉と喧嘩して家出した時に、三輪に会いに行ったが、三輪は家になかつた。そして三輪の母親の口から三輪の洋行の話と緑紫が一時毎日のように三輪の家へ行っていたことを聞いた。元々三輪と兄、千早文学士との間には何もないと固く信じていた富枝の心が揺れ始める。

女優としてデビューするのに三度も失敗した三輪がなぜ新聞に「千早阿一郎氏の寵妾」として報道され、洋行するに至つたのか、その理由について、富枝の考えは次のようである。

新聞記事だけのことなら、千早が洋行費用を出してやるまでの弱点とは思はれない。三輪はあの記事を利用したのであらう。傷つけられた名誉の賠償金額が洋行費用なのかも知れない、それが、然もなければ新聞記事が事実なのかもしれないと富枝は疎ましく思つた。（十六）

確かに他人から見れば右が一番納得できる推測であらう。すなわち三輪は緑紫と千早と何か曖昧な関係にあるのかもしれない。このような推測を可能にする三輪に対して、富枝は「何となく三輪とは

遠く離れて了つたやうな気がした。自分と対ひ合つた敵陣のなかへ三輪が立つたやうに感じ」（十六）ている。自分の女らしさを使って自立を図る三輪について、富枝は「偉いと思つた」が、やはり三輪が使つた方法に違和感を覚える。富枝が望んでいるのは、男性の力を利用せず、完全に自分の力で自立することである。富枝は三輪と同じく自立という目標を持っているが、目標を達成するために使おうとする手段は全く異なる。

以上の分析からわかるように、染子と三輪、どちらの道も富枝が求める自立の道とは異なっている。そのため、富枝は考えたあげく、二人の側から離れ、二つの道を除外する。

四、〈あきらめ〉という方法

「あきらめ」に出る主要人物は殆ど女性であるが、中に富枝と同じ重要な位置に置かれている一人の男性がいる。それは富枝の義兄の染谷緑紫である。緑紫に関する描写はそれほど多くないが、実際に小説の至る所に彼の影が感じられる。山崎真紀子は、『あきらめ』に登場する人物は、衣装や容貌、肉体などの描写が必ず施されているが、緑紫と富枝だけそのような描写がないのは、緑紫は富枝と同じく「物語を司る登場人物、つまりもっとも力を持つ存在」だからと指摘した。

小説の冒頭において、富枝は既に女学校を退学させられたことに

より、自分の行く末を選ばなければならぬ境遇に陥っている。もし三輪と染子が富枝を決心させる触媒と言うなら、緑紫は、富枝が何らかの道を選ばないといけない境遇に追い込まれる一つの大きな原因であろう。富枝は緑紫から離れるために、いろいろな場所へ行き、脱出の方法を探っていた。

注目すべきことは、富枝がどこへ行っても最後は染谷家に戻らなければならぬことである。そしてこの帰るべき染谷家について、富枝の心境が次第に変化していく。最初の一節で富枝が女学校から退学するつもりで出て染谷家に戻る時に、富枝の眼に映る染谷家は以下のようなのである。

家の前には綺麗に水が撒いてあつた。

（中略）

牛乳受け函に浅黄色の雫が、溜つては落ち、溜つては落ちし
てゐる。三寸程開き残した潜り戸には、もう半分通り打水が乾
きかけてゐて、敷居に流れてる水の溜まりが、涼しさうに戦い
でゐた。（二）

染谷家に着くまでの富枝を不愉快にさせる風景や人物とは違い、この時の富枝にとって、自分の拠点といえる染谷家はまだ心地いい居場所である。ところが、この穏やかな心境は緑紫と貴枝の浮気疑惑で破壊され、次第に悪化していく。富枝は「狭量の姉は別として、かゝる兄に文芸の作に就いての意見を聞き、主義を做はうとした自

分までが卑しまれた」(十一)と考えはじめる。

その時、富枝は、すでに染谷家にいるのが嫌になっている。緑紫が三姉妹の仲を引き離す張本人だと富枝は信じている。故に家出を機に、富枝は三輪と染子の方へ接近し始める。こうみると、染谷家において緑紫の力を借りて自立まで忍耐するのが富枝の最初の道であろう。富枝はその道を自分で否定したからこそ、新しい道を探し始めたのである。

一方、富枝が緑紫から離れたがる理由はもう一つある。当時名高い文学士や山陽堂の編集である緑紫に、富枝はかつてよく文芸創作についての意見を聞いていた。他人からみても、富枝より緑紫の方が余程頼もしい。だから俳優たちとの打ち合わせについて用意がない富枝へ、吉櫻は「染谷さんにご相談を願ひませうか」(十四)と提言する。ところが、それまで緑紫の言いなりになっていた富枝は、三輪と染子への接近により自分の進むべき道をさとる。二人への接近の完了後に、富枝が緑紫の新作について評価するところがある。

自分は已に遅れて了つたにも拘らずまだ、時代相応に歩調を早める事ができると確信してゐると、時代は進歩したのではなくただ変遷したゞけのもので、自分の時代は唯一寸先んじた腫子の後にある、直ぐ又自分の時代に戻つてくる事があると同然としてゐる人がある。兄はその前者の方で遅れながら大手を振つてゐる。遅れて了つてゐる癖に時代と並んでる積りで出姿

婆つてるのも憎気がなくて好いと、富枝は兄へ対して此様評もした。(二十四)

三輪と染子を選んだ道を除外できた富枝の頭には、すでに緑紫とは違った創作理念が形成されている。この新しく形作られた富枝の意識はすでに時代遅れの緑紫から一部抜け出している。

しかしながら、緑紫のような当時の文学界において影響力が強い人から逃れるのはなかなか難しいことである。そこで、行く道のない富枝が考えた方法は、ひとまず岐阜に帰ることであった。岐阜の義母が富枝を迎えにくる時、祖母は老けているとはいふものの、大した病気ではなく、すぐに帰らなければならぬ切迫した状況ではない。お母の言う通り、「行かないでも済みさうな」ものである。しかし、富枝は「容易くお伊豫と一所に国へ帰る事を誓つた」。なぜかという、岐阜帰りという一見して「出世をあきらめる」ように見える方法は、富枝をどこに出かけても結局染谷家に戻るほかにローテーションから解放する術だからである。

二つの道を否定し、行くところもない富枝のために、小説は「岐阜」という予備基地を用意する。それは、女性の自立と出世の環境を用意していない女子教育に対して、富枝が考えた一種の対策、あるいは引き延ばし戦略だとは考えられまいか。

五、富枝から俊子へ

和田謹吾²¹は、田村俊子は「貴枝の世界には自分の幼少期、富枝の世界には青春期、都満子の世界には成年期の経験を巧みに分割している」と述べている。

いうまでもなく、俊子自身の経験のかけらは「あきらめ」の随所に窺える。特に、富枝と俊子との関連が一番多い。少なくとも四箇所を確認できる。まず、富枝は脚本家を目指し、明治文壇の一隅を占めたがる。俊子は「あきらめ」連載完結後間も無く発表されたエッセイ「私の女優を志した動機」(『新婦人』第一年一号、明治四四年四月)に以下のように書いている。

けれども二三度舞台に乗つたことは乗りました。それは私が小説などを書いてゐる間に脚本の方もやつてみたいと思ひ出したからでした。

つまり、富枝が脚本を書くという設定は俊子の願望と合致している。また、富枝が脚本を新聞懸賞に投稿することも、田村松魚に強要されて『大阪朝日新聞』に投稿する俊子と重なる部分がある。また、「あきらめ」の最初の一節における富枝と英語教師ミッセス、ミスとすれ違うシーン²²も、俊子が女学校時代に憧れた英語先生を思わせる。

実は、俊子は日本女子大学に在学する時に、ミス・グリーンとい

う英語教師を慕っていた。その感情を俊子は「青葉日記」の中に書き込んでいる。ミッセス、ミススを眺める視線も俊子の女学校生活への懐かしさが投影されているだろう。さらに、染子は「お姉様が好きだと云つて」、「江戸紫の二枚衾を着て寝た」というシーンがあるが、このシーンからは俊子が国文の先生を好きになり、結果、その先生が好きな紫色まで好きになったというエピソード²³が想起される。

染子と三輪は一見俊子との関係が薄いようにみえるが、完全に俊子自身との関連性がないとは言ひ切れない。三輪は富枝の憧れの先輩で、わずか半学期で退学し、女優を目指して活動し始める。彼女は富枝の憧れの対象だけではなく、一緒に自分の志を語り合い、一緒に夢を追おうとした仲間でもある。三輪の女優志望という設定は、女優になろうとしていた当時の俊子の願望を反映している。「あきらめ」を投稿してすぐに俊子は女優活動を再開する。つまり、俊子は自分の女優への憧れを三輪という人物に託していると言えるだろう。さらに興味深い点として、染子も富枝が書いた「早子姫」という劇の主人公に扮した。つまり本当の女優とは言えないが、染子も演じる経験を持っている女優の雛形として造形されている。

染子は文部次官の娘で、富枝を慕っている。ところが染子は「呼吸器病」にかかっている。富枝はこの病にかかっている後輩を非常に可愛がっている。従来の論は初出で使う「脳神経衰弱」という病

名に注目し、「同性愛がタブー視され出した時代状況」²⁴と関連づけ
てみられてきた。しかし、俊子自身も日本女子大学の第一回生とし
て入学後、わずか一学期で心臓病により退学している。富枝が染子
に向ける憐憫の情や視線は、病気で退学せざるを得なかった自分へ
の感情を含んでいる可能性がある。

注目すべきは、富枝、三輪、染子の三人と俊子は一つの共通性を
持っていることである。それは、高等女子教育を最後まで受けてな
いということである。実際、染子を除いて、富枝、三輪と俊子は全
員女学校を中退した。染子の卒業については書かれていないが、病
気のことを考えると、おそらく勉強は続けにくいだろう。それに、
最後の一節で染子には「許嫁の良人」ができ、来年すぐ結婚するか
もしれないことからみても、順調に卒業できないはずである。すな
わち、俊子を含めて四人とも女学校を離れ、次の方向を明確に掴め
ず宙に浮かんでいるような状況にある。

俊子は三人の女学生の道と自分の経験とを結び付け、より魅力的
な人物を生き生きと描く。そして三人の女学生を通して明治期の女
子教育に対して疑問を投げかける。

おわりに

「高等女学校令」が公布されてから、良妻賢母思想は、一九〇〇
年代初頭に高等女学校教育の中心理念として定着していく。この思

想の枠から逸脱しようとする女学生たちは、「生意気」、「自由奔放」、
「お転婆」、「墮落」などのラベルをつけられ、他の女性の躰の材料
と新聞のネタにされる。しかしながら、罵声を浴びせられる女学生
たちの行為の裏にある事実はその当時の人々に無視される。明治女性教
育の根本的な目的は社会的な女性の自立ではなく、家庭的な女性の
育成にあり、女性の職業の自立と人格の確立は求められていない。
このため、本当に自立しようとする女学生を待ち受ける国家的仕事
は何も用意されていない。これらの現実には、女学校から逸脱し、自
立したがる女学生たちを困惑させる。彼女たちは自分の前途につい
て迷いに迷ったあげくに、世論と家庭制度に妥協する。

「あきらめ」に登場する染子と三輪という二人の女学生の結末は、
あたかも自立しようとする女学生たちの二つの典型的な果てを示し
ている。染子は自由な恋愛を求めたが、親の言う通りに妥協して面
識がない人と結婚する。三輪は男性を利用して出世したが、ス
キャンダルで日本から離れる。この二つの道とも選ばない富枝は、
俊子に最も近い分身として、女学生が学校を離れて出世できる環境
を用意していない社会を告発しているかのようである。女学生とい
う存在の新奇さばかりに注目する同時代の小説や言説よりも、一歩
早く当時の教育システムの妥当性に疑問を投げかけた小説として、
「あきらめ」は評価できるのではなからうか。

【注】

- 1 「あきらめ」は明治四四年一月一日から三月二二日まで、『大阪朝日新聞』の懸賞小説二等として連載される。本稿に使う原文は全て『田村俊子作品集』第一巻（オリジナル出版センター、昭和六二年二月）に拠る。引用に際して旧漢字は現行のものに改め、ルビは適宜省略した。
- 2 「女学校」は通常高等女学校を指し、「女学生」も高等女学校の生徒を指すことが多いが、本稿においては、女子大学と女子大生を指す場合も「女学校」と「女学生」という呼称を使う。
- 3 森田草平『あきらめ』(序) (金尾文淵堂、明治四四年七月)。
- 4 長谷川啓「解題」(『田村俊子全集』第2巻、ゆまに書房、平成二四年八月三一日)。
- 5 小平麻衣子「再演する〈女〉——田村俊子「あきらめ」のジェンダー・パフォーマンス——」(『国語と国文学』77(5)、至文堂、平成二二年五月)
- 6 山崎真紀子「富枝の敗北——町田とし子『あきらめ』論」(『田村俊子の世界——作品と言説空間の変容』彩流社、平成一七年一月) 一一〇頁。
- 7 設楽舞『あきらめ』の斬新性」(『今という時代の田村俊子——俊子新編』至文堂、平成一七年七月)。
- 8 中冨邦「写真・絵画集成 日本の女たち第6巻教育をつくる」(『日本図書センター』、平成八年一月)。
- 9 浦門「教育時事」(『朝日新聞』東京・朝刊、明治三六年四月一〇日)。
- 10 棚橋絢子「女学生墮落の遠因」(『婦人と子ども』8(2)フレールベル會、明治四一年二月)。
- 11 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』(中央公論新社、平成一九年二月) 一三五頁。
- 12 稲垣恭子、竹内洋『不良・ヒーロ・左傾——教育と逸脱の社会学——』(人文書院、平成一四年四月) 一四四頁を参照した。
- 13 明治三二年八月一七日より一〇月二二日までと、明治三三年一月一日より五月二〇日まで、『大阪毎日新聞』に連載。
- 14 小杉天外「魔風恋風」(『読売新聞』明治三六年二月二五日) より引用。
- 15 『田山花袋全集』第1巻(文泉堂書店、昭和四八年九月) より引用。
- 16 『定本漱石全集』第1巻(岩波書店、平成二八年二月) より引用。
- 17 三宅花圃『藪の鶯』(六)(金港堂、明治二二年六月) より引用。
- 18 注4に同じ。
- 19 ただし、千早阿一郎とのスキヤンダルで名誉を傷つけられた三輪が帰国後、再び男性社会の日本で女優として出世できるかという疑問も残る。
- 20 注6に同じ、一〇五頁。
- 21 和田謹吾「木乃伊の口紅・あきらめ」(『國文學…解釈と教材の研究』13(5) 學燈社、昭和四三年四月)。
- 22 「白手袋を箝めながら、英語の教師のミッセス、スマスが正面の石段を下りて来た(中略)金髪の髻が帽の下から覗み出して、真つ白な頸筋が白玉のやうに綺麗だ。富枝は後から、その姿を眺めてゐた。」(一)。
- 23 瀬戸内晴美『田村俊子』(文藝春秋、昭和五八年二月) 三三〇頁。
- 24 注4に同じ。

—— ちょう・び、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ——